

古名畫の模本製作

來年は山水屏風と嚴島經卷模寫

東京美術學校では從來卒業生在學生をして當らしめて居た古美術模寫事業が、既に第二期を終つたので、來春早々第三期に着手する筈で、教授松岡映丘氏が過般京都方面に出張し原畫借入の交渉を纏めて來たが、來年度に先づ着手すべきは嚴島經卷と、高尾神護寺の山水屏風である

嚴島經卷は全二十八卷で之に無量義經、觀音賢經、阿彌陀經、摩訶般若波羅密多心經、大樂金剛不空眞實三摩耶經の五卷がついて居る、平家一門の人々が寫經して奉納したものだ、藤原時代の寫經裝飾の代表作で、金銀切箔等を惜氣もなく用ゐ、扉繪の繊細典雅なことも驚くべきもので、模本としては、田中親美氏が十數年の歳月を費してやつたものが、今年の春三溪園の大師會に出品されたが、美術學校が之をやることは實に當を得て居る、模寫の執筆は服部有恒氏外三名位が擔任し、尙吉村忠夫氏之に参加する筈である

之に次いで、高尾神護寺の山水屏風は、吉村忠夫氏が二月に入浴して熱心に之をやる筈であるが、約一ヶ月位はかゝる筈である之は藤原時代に於ける公卿の生活振りを描いたもので、その筆致は極めて優雅で、後世土佐派を生んだ根源とされて居る、尙此の二者が出來ると、信貴山縁起等に移り漸次此種のものを描へて行くさうである

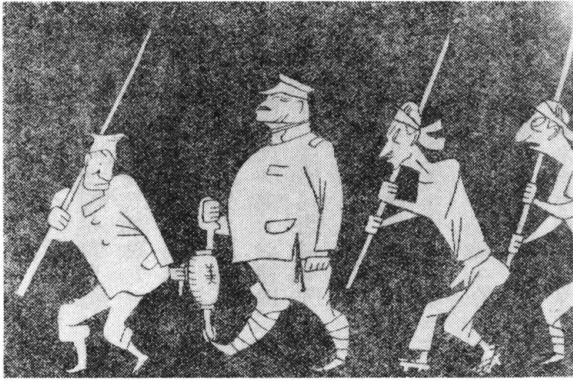
模寫は下村觀山氏あたりも熱心にやつたもので、高野山の二十五菩薩來迎圖などは殆ど原物と判別つかぬ位よく出來て居る、來

年は必ずやかうした仕事も盛んになり行くであらう。

## ⑥ 関東大震災

大正十二年九月一日の大地震の際、本校は夏休み中とあつて事務職員と彫刻科生徒の夏季研究会会員が登校していただけであつたが、幸にして校内からの出火もなく建物の損害も少なかった。特に文庫收藏の美術品が概ね無事だつたことは僥倖と言わねばならない。ただし、大地震の後、東京市内各所から生じた火災は大火災を引き起こし、そのため百三十万人近い市民が公園や寺院、神社その他の避難場所に殺到した。なかでも上野公園は最大の避難場所となり、本校にも群衆が押し寄せ、それに対応するため本校は十月三十日までの二ヶ月間を休業とし、その代りに冬休みを廃止した。

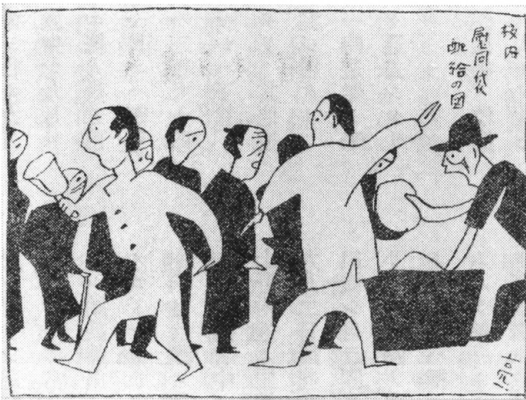
震災に関する本校の公式記録と看做すべきものには先ず「東京美術學校震災救護施設状況調」(自大正十一年文部省往復書類<sup>掛務</sup>に収録)がある。これは臨時震災救護事務局より文部省を通じて照会があつたために本校が作成した文書である。次に「震火災ノ際功績者調査」(大正十一年職員ニ関スル書類<sup>掛務</sup>に収録)がある。これは震災同情会長より文部省に照会があつたために本校が作成したものである。ここには前者を掲載するが、外に準公式記録として『東京美術學校校友会月報』第二十二卷第五号「震災記念号」が発行されており、特に同誌所収の鈴川信一(体操および遠近法授業講師、教務掛主任兼庶務掛、陸軍歩兵大尉)著「震災日記」には九月一日から同五日までの校内の異状なさまが如実に記されているので参照されたい。なお、『東京美術學校の歴史』(桑原実監修、磯崎康彦、吉田千鶴子著。昭和



同「田辺先生校内夜警の事」



塑造部5年生安本亮一筆「震災漫画」  
の一部「正木校長先生、鈴木先生親  
子対面を見て涕泣の事」  
(校友会月報震災記念号より転載)



同「校内慰問袋配給の事」



同「避難者に水接待の事」

五十二年、日本文教出版）223〜226頁にも本件  
に関する記述がある。

東京美術学校震災救護施設状況調

本校ハ九月一日ノ大震災ニ被害程度比較  
的輕ク同二日夜上野山下邊ノ人家併ニ上  
野停車場等延焼ノ際火ハ公園内ニ及ビ貸  
席常盤華壇全焼シ日本美術協會ノ建物一  
部ヲモ焼キタリ 本校ハ其飛火ヲ蒙リ一  
時危急ニ瀕セシガ幸ニ火災ヲ免カレ殆  
ソ完全ニ学校諸建物ヲ維持スルヲ得タリ  
是ヲ以テ避難市民ノ本校ヲ臨ンデ投入  
スルモノ頗ル夥シク一時ハ數千人学校構  
内ニ填塞スルノ状勢アリタリ 其救護施  
設等ニ関スル狀況概要左記ノ如シ

(一)避難者收容人員

本校ニ於テ避難者多數ヲ收容救護セシハ  
震災当日ノ九月一日夕刻ニ始マリ十月七  
日ニ至リ東京市カ建設セシ上野公園内  
「バラック」ニ移住引渡ヲ為セシ迄三十  
七日間ナリ 其人員數ハ最初三日間ハ非  
常ノ大衆ニテ且出入異動頻繁ニシテ混乱  
雜沓甚シク計數スルヲ得ズ 九月四日ニ  
至リ少シク鎮靜シテ人員モ餘程減ジタル  
ニ因リ始メテ第一回ノ人員調査ヲ施シタ

ル處一千百十五人アリタリ 爾後日々ニ幾十人カラ減ジ行キ九月八日ノ調査ニテハ九百六十一人トナリ其後モ引續キ減少シ九月廿二日「カード」式ニ依リ較々精密ナル調査ヲ試ミシニ總人員五百五十六人百二十三家族ナルコトヲ確メ得タリ 十月一日ニハ四百二十七人ニ減ジ十月七日東京市ニ引渡セシ時ノ人員ハ三百九十四人百八家族ニ減少シ居タリ 而シテ本校ニ避難收容セシハ下谷、浅草、両區民ヲ主トシ神田、本郷兩區民モ若干アリタリ 其他遠ク日本橋、京橋、芝、本所、深川ノ在住者モ幾人カ混ジ居タリ 此外地方人ニシテ上野附近ノ旅館ニ滞在中避難シテ一時避難シ来リシモノアリ 此等ハ交通機關ノ回復スルニ隨ヒ夫々退去シタリ

### (一) 收容狀況

九月一二日ノ收容頭初ニ於テハ避難者ハ学校構内ノ體操場、校庭空地等ヲ擇ビテ集團露臥シ餘震ヲ怖ル、為ニ屋舎内ニ入ルヲ欲セズ 本校ニテモ考慮スル所アリシヲ以テ教室等ハ嚴ニ閉鎖シテ之ヲ開放セズ校内ニ藏儲セシ材木、亜鉛板、筵等ノ諸材料ハ及ブタケ避難者ニ貸與シテ急造假小屋ヲ設營セシメ一時落着キタリシモ三日夕刻ニ至リ大驟雨襲来シ露臥シ居タルモノハ一齊ニ校舎ノ庇下等ニ群集シテ雨ヲ避ケ窮狀見ルニ忍ビズ 依テ本校ニテハ教室以外ノ附屬諸建物ノ中柔剣道々場、弓術道場、学校俱樂部ノ三建物其他一二ヶ所ヲ開放シテ其急ヲ救ヒタリ 其後チ日ヲ經過スルニ隨ヒ避難者數モ漸次減退セルニ由リ校庭空地等ニ於ケル仮小屋ヲ撤廃セシメ開放シタル建物の中ニ全部收容セリ 此收容シタル建物の中俱樂部ノ如キ床高ク疊ヲ敷キアリ道場モ半ハ疊ヲ敷ケリ 九月十日前後ヨリハ夜間モ電燈點シ水道ノ水ハ屋内ニテ自由ニ使

用シ得ラレ避難者ニ取リテハ最モ便利幸福ノ状態アリ 是ヲ以テ避難者ハ非常ナル感謝ノ念ヲ学校ニ致シ能ク本校職員ノ命令ニ順從シ始終静肅ノ態度ヲ保チ三十餘日ノ久シキ間妄ニ紛擾ヲ起ス等ノコトナカリキ

### (二) 自治團ノ組織ト食糧物資ノ受給

本校避難者中ニ中日美術協會主事石野哲弘ナルモノアリ 同人ハ上野附近ノ旅館ニ滞在中今回ノ災厄ニ遭遇シタルモノニテ同人ハ九月二日蹶起卒先シテ避難者中ノ有志五十人ヲ糾合シテ自治團ヲ組織シ自ラ團長ノ任ニ當リ團員ヲ部署シテ諸般ノ活動ヲ開始シタリ 自治團ノ興起セシハ當時種々ノ流言飛語アリテ避難者ノ昂奮ト恐怖トハ極端ニ達シ人心恟々トシテ安定セズ之ヲ鎮撫安定セシムルヲ第一トシ同時ニ避難者全體ノ為ニ食糧ヲ得ルノ道ヲ講ズルト傷病者ヲ救済スルノ方法ヲ取ルニ在リテ自治團ノ活動ハ總テ本校救護事務關係職員ノ承認又ハ協力ノ下ニ行ハレタリ 自治團ノ組織成立後石野團長ハ本校職員ト交々下谷區役所(區役所ニ失シテ上野公園自治團)ニ交渉シテ給米ノ請求ヲ為シ玄米數俵ヲ得内ニ飯事務所ヲ開ク 又避難者中ニハ下谷車阪簡易食堂ニ關係セシモノアリシヲ以テ同食堂ニテ使用セシ大釜三個ヲ借入レ来リ学校構内ニ炊事場ヲ立テ九月三日早曉ヨリ炊出ヲ開始シ自治團員手ヲ分チテ遍ク避難者ニ配給シタリ 此日ヲ始トシテ爾後毎日同様ノ方法ニ拠リ茲ニ給養ノ道開クルコトヲ得タリ 其他副食物、衣類等ノ受給モ皆自治團ニ於テ本校職員監督ノ下ニ之ヲ行ヒタリ 此ノ如クニシテ本校内避難者ハ各個人自ラ勞苦スル所ナクシテ坐シテ給養セラル、ヲ得タルハ全ク自治團ノ恩澤ニ因ルモノト謂フ可シ 九月十日ニ至リ

自治團ハ解散シ構内炊出モ是日ヲ以テ終了スルコト、ナリ十一日ハ避難者各自區役所（自治會館）ニ出頭シテ直接炊出米ヲ受クルコト、ナレリ 然ルニ此方法ハ各個ノ勞苦ト不便甚ク到底永續スベキニ非ラザルヲ以テ本校職員ハ避難者總代矢島高也ト協議シ下谷區役所ニ交渉シテ避難人員ニ対スル糧米現品ノ配給ヲ受クルコト、シ学校内ニ於テ職員監督ノ下ニ避難者總代ヲシテ各個ニ分配セシメ九月十二日ヨリ避難者各個ニ自炊ノ方法ヲ始メ斯クシテ十月七日避難者全部ガ本校内ヲ引拂フマデ此給養方法ヲ繼續セリ上述ノ如ク本校内避難者ノ給養ハ始終比較的良好ニ行ハレ甚シキ悲惨ニ陥ルコトナカリシハ喜フベキ次第ナリト思料セリ 又給水ニ就テハ九月十日頃迄水道断水中ハ学校構内ニアル二個ノ掘井ノ水ヲ用ヒタルモ十分周給スルニ足ラズ警察官署ヨリ大樽數箇ニ滿水シタルモノヲ自動車ニテ毎日一兩回搬入シ來リテ給水シタリ 十日頃ヨリ水道開通スルニ及ビ学校構内ニハ數箇所ニ水道栓設置シアルヲ以テ避難者ハ自由ニ之ヲ使用シ尤モ便ヲ得タルガ如シ

#### (四)衛生状態

本校構内ニ避難セシ多數人中老幼婦女ノ如キハ極度ノ驚愕ト疲勞トノ為メ安息ヲ得ルト同時に發病スル者多ク其他ニモ火傷セシモノ脱出ノ際ニ負傷セルモノ等少カラズ 避難者中ニ於テ自治團ノ組織成ルヤ衛生係ヲ置キ此等傷病者ノ救護ニ勉メタリ 然ルニ幸ヒニモ九月二日夜群馬赤十字支部ノ救護班日暮里驛ニ到着シ翌三日朝適當ナル救護所開設地ヲ物色シテ本校ニ來リ構内ニ救護所開設ノ希望申出アリ 本校ハ喜ンデ之ニ應ジ及ブダケノ便宜ヲ計リ即時開設シテ診療ニ従事シツ、アル内四日ニハ福島赤十字支部ノ

救護班亦本校ニ來リ構内ニ在ル帝國學士院建物ノ一部ニ其救護所ヲ開キ群馬支部ハ内科ヲ主トシ福島支部ハ外科ヲ主トシ兩支部熱心治療救護ニ盡力シ校内避難者ハ多大ノ恩恵ヲ蒙リ人心ヲ安定セシムル上ニモ甚深ノ好影響アリ 福島支部ハ九月二十八日ヲ以テ其救護所ヲ閉ジ他方面ニ移動シ去リ群馬支部ハ十月七日避難者ガ市設「バラック」ニ収容セラル、迄開設シ居リ尚「バラック」移轉後ノ避難者ノ治療ヲ繼續スル為メ十月十日迄依然開設シ居リ十日ヲ以テ閉鎖撤退シ他方面ニ移動スルコト、ナレリ 前述ノ如ク本校内ニハ災後直ニ群馬福島両赤十字支部ノ救護所開設サレシヲ以テ傷病者ノ手當甚ダ能ク行届キ患者ハ柔剣道々場内（場内ノ半分ハ）ニ収容シ看護ノ為メ患者ノ家族モ總テ同一場所ニ居ラシメタリ 最初ノ内二三人傳染病者發生セシガ蔓延スルニ至ラズシテ終熄セリ 衛生保健ニ関シテハ本校職員ハ其注意ヲ怠ラズ避難者ニ命令又ハ勸説シテ始終清潔ヲ保ツ様ニセシメ又日々校ノ使丁等ヲ督シテ汚物塵芥ノ始末ヲ為サシメ消毒法ヲ施行シ便所ノ如キモ既設ノモノ以外ニ數ヶ所ニ臨時仮設シタリ 此ノ如ク衛生状態モ給養方法ト共ニ良好ニシテ經過スルヲ得タリ

#### (五)軍隊憲兵隊ノ駐屯

九月二日戒嚴令ニ依リ近衛歩兵第二聯隊ハ上野方面警備ノ為メ出動シ來リ本校構内ニ聯隊本部ヲ開設シタキ交渉アリ 本校ハ之ヲ承諾シ建物ノ一部ヲ貸與シ同日正午頃ヨリ本部ヲ開キ多數ノ將校兵士ハ本校ヲ根拠トシテ上野方面ノ警備ニ従事シタリ 此聯隊本部ハ九月八九日迄繼續シテ他ニ移動シ去レリ 淺草憲兵分隊ハ九月一日夜火災ニ罹リ同夜十二時頃隊員本校ニ來

り校内建物ノ一部ニ仮駐屯所ヲ設ケ移轉シタキ旨ヲ請ヒ二日午前四時頃ニ所属隊兵馬匹等移轉シ来リ上野方面ノ警戒ニ任ジタリ九月十六日ニ至リ臨時上野憲兵隊組織セラレ本部ヲ本校内ニ設置シ浅草分隊ハ上野分隊ト改称シ依然本校内ニ駐屯シ十月八日ニ至リテ憲兵隊全部本校ヲ撤退シ他ヘ移轉セリ

是等校内ノ駐屯軍隊憲兵隊ニ對シテハ建物貸與ノ外本校ハ其要請ニ應ジ及ブダケ種々ノ便宜ヲ與ヘタリ而シテ軍隊憲兵隊ノ駐屯ハ当時非常混乱ノ際校内收容避難者ノ人心ヲ鎮定シ又学校ノ安寧ヲ保持スル上ニ於テ多大ノ影響アリタルコト勿論ナリ

(六) 夜警

震災直後五六日間ニ互リテ鮮人襲来等種々ノ流言飛語傳播シ避難者ノ恐怖甚シク夜間モ安寢セザル有様ナルニ依リ自治團ノ一部ト本校職員併ニ卒業生中倔強ナルモノ校内夜警ノ任ニ當リ交代シテ徹夜校ノ内外ヲ巡行警戒シ避難者ヲ安堵セシメ兼テ出火其他ノ事故發生ヲ防遏スルニ勉メタリ 夜警ハ十月七日避難者ノ退去スルマデ之ヲ繼續セリ

(七) 救護従事ノ職員

避難者ノ救護ニ従事セシ本校職員ハ事務掛ノ職員(庶務、教務、會計、文庫)ヲ主トシ卒業生数名在校生数名其補助ヲ勤メ教官中ニモ兩三名ハ時々参加シテ補助シタリ而シテ活動ノ範圍ハ全然校内ノミニ限ラレ校外ニ及ボスノ違ナカリキ 今救護事務ニ直接従事シ尤モ功勞アリシモノ、職氏名ヲ左ニ録ス

講師(教務掛主任) 鈴木 信一  
後備陸軍歩兵大尉

右学校構内官舎ニ住シ救護事務總指揮ノ任ニ當リ晝夜ヲ問ハズ

始終一貫シテ盡瘁シタリ

講師(教務掛) 赤間 運藏  
後備陸軍歩兵少尉  
助教授(教務掛兼勤) 田邊 孝次  
豫備陸軍歩兵少尉  
同(教務掛兼勤) 和田 季雄  
豫備陸軍歩兵中尉  
雇員(文庫掛) 青山 正治  
同(會計掛) 金田 春吉  
同(備人監督) 五十嵐忠六

右同人ハ学校構内官舎ニ居住シ救護事務ニ関シテ始終尤モ困難ノ衝ニ當リ日夜奮勵セリ

卒業生(豫備陸軍輜) 飯森 定省  
重兵少尉  
同 小澤小一郎  
同 三栖 敏雄  
生徒(金工科三年) 手塚 重治  
同(図案科三年) 内田利三郎  
同(西洋畫選科五年) 筒井 昇  
以上

大地震の災禍は東京およびその近辺在住の本校関係者多数にも及んだ。前出校友会月報所載「本校関係者罹災調」には大正十二年十月五日までに判明した罹災情況が記されているが、それによると教授森井健介は家屋倒壊により母を亡くし、海外留学中の教授矢代幸雄の留守宅が焼失して父が行方不明となり、助教授平田松堂および畑保之、助手野口吉五郎、會計掛岩崎巖、文庫掛金子千代雄、柔道指南井上縫太郎その他職員は家屋焼失、講師今和次郎、庶務掛芹沢

閑、弓術指南本牧太一らは家屋倒壊の被害を受けた。また、卒業生でないし在校生では星川清雄が入院中の病院が倒壊して死去した外、神谷甚一郎、福与晋作が死去、下村観山をはじめとする多くが家屋倒壊ないし焼失の被害を蒙った。そのため校友会は常務委員白浜徹、鈴木信一、足立芳五郎の発起による見舞金募集を行い、罹災会員を慰問した。

なお、本年の年報の「概況」に東京帝国大学文学部美術史講座のために教室の一部を貸与したことが記されているが、それは数年間に互った模様で、隈元謙次郎は当時を振り返って次のように記している。

私をはじめて矢代〔幸雄〕先生の風貌に接したのは、<sup>〔天〕</sup>十正十四年の春のことであった。それは東京美術学校の旧図書館の北側にあった校舎の入り口であった。鏝広のスペインの闘牛士か修道僧のかぶりそうな黒い帽子をかぶり、小豆色の革のコートを着け、右腕に同じ色の大きな鞆をかかえた若い芸術家風の先生である。間もなく、それが最近大変な研究業績を挙げて留学から帰国したばかりの矢代教授であることを聞かされた。さすがに、美術学校というところは、日本人ばなれのした先生が居るところだなあと、思い、きわめて強い印象を受けたことを思い出す。

当時、われわれが入学した東大は過る十二年の震災のため大被害を受け、有名な八角堂をはじめ文学部の研究室や教室もくずれ落ちて居た。美術史の講義は滝精一教授も団伊能助教も講義とスライドを併用して進められていたが、そのための教室がなかつたのである。そこで、美校との相談で、もと同校写真科のあった階段教室を借用することとなったのである。その校舎には矢代先生の研究室もあったが、その校舎の一室を研究室として借用し、また講義は前述の階段教室で行われた。そこで、われわれは毎週何回か本郷から弥生町の坂をくだり、逢初の新坂をのぼって上野へ通った。そして、帰国早々の矢代先生の風貌に接したわけである。〔下略。石沢正男、田沢坦らもこの仮教室に通った。〕

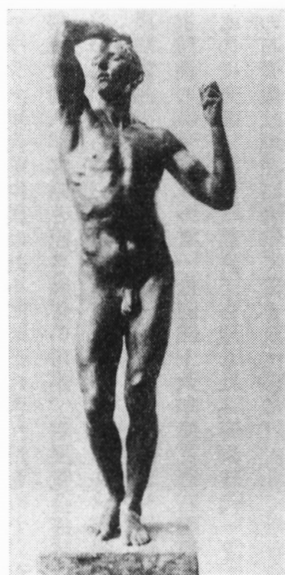
たのである。そこで、美校との相談で、もと同校写真科のあった階段教室を借用することとなったのである。その校舎には矢代先生の研究室もあったが、その校舎の一室を研究室として借用し、また講義は前述の階段教室で行われた。そこで、われわれは毎週何回か本郷から弥生町の坂をくだり、逢初の新坂をのぼって上野へ通った。そして、帰国早々の矢代先生の風貌に接したわけである。〔下略。石沢正男、田沢坦らもこの仮教室に通った。〕

〔矢代先生を偲ぶ——先生と美術研究所』『日伊文化研究』第十四号。昭和五十一年三月、日伊協会〕

浅沼商会寄贈の建物(第二巻684頁)はこの震災で大破した。

⑦ ロダン作「青銅時代」「バルザック」石膏像の寄贈とデルス  
ニス

大正十二年四月、本校では教官、生徒の希望によりオーギュスト・ロダン作「青銅時代」(L'Age d'Airain、本校文書において「黄銅時代」と翻訳されている)の石膏像を保管、展示すること



「青銅時代」石膏像